平成 23 年(2011) 3 月 31 日

4号

八尾・よろず考古通信

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌　年２回発行

平成 22 年度秋季企画展『やおの旧石器時代と縄文時代－八尾に海があったころのくらしー』から

1. はじめに

22 年度の秋季企画展として、八尾市内の後期旧石器時代から縄文時代(約 40,000～約 2,300 年前)を対象とした『やおの旧石器時代と縄文時代－八尾に海があったころのくらしー』と題した企画展を行いました。

展示では、「Ⅰ旧石器時代の八尾」「Ⅱ縄文時代の八尾」「Ⅲ縄文から弥生へ」と題した小題を設け、地質学から推定される大阪平野の変遷や考古学成果による視点から垣間見られる人々の営みの証を考えて見ました。ここでは、これらの一部を抜粋して紹介します。

年代	時期区分	時代
約 40,000 年前	前半	後期旧石器時代
約 28,000 年前	後半	
約 12,000 年前	草創期	縄文時代
約 10,000 年前	早期	
約 6,000 年前	前期	
約 5,000 年前	中期	
約 4,000 年前	後期	
約 3,000 年前	晩期	
約 2,300 年前	前期	弥生時代

旧石器時代と縄文時代の時期区分と年代(年代は従前の説による)

2. 後期旧石器時代後半の八尾

①後期旧石器時代後半の自然環境

およそ23,000～20,000年前の日本列島は、氷河期の時代でした。大陸は広く厚い氷におおわれて、海水の減少により海水面が現在より約 100mも下がっていました。瀬戸内海は干上がり、当時の海岸線は紀伊水道付近であったと推定されています。

そのころの大阪は、東は生駒山地、西は淡路島、北は六甲山地や北摂山地、南は和泉山脈に囲まれた「古大阪平野」と呼ばれる盆地でした(図１)。当時の平均気温は今より６～８℃も低く、雨量も少なかったようです。今日の長野県の高原部あたりの気候であったと推定されています。山々にはヒメマツハダやコメツガなどの針葉樹とシラカバやナラ類の広葉樹が混在した森が存在していました。

このようなの環境下で、旧石器時代の「遊動の狩人」達はナウマンゾウやオオツノシカを求めて、古大阪平野周辺を中心に活動の痕跡を残しています。八尾市域では、市域南部の河内台地先端部にあたる八尾南遺跡・太田遺跡および西側に隣接する大阪市の長原遺跡で狩場のベースキャンプで使用された後期旧石器時代前半から後半に至る石器類が数多く発見されています。

図１　古大阪平野の時代〈後期旧石器時代後半〉(約 23,000 年前)　趙哲済・松田順一郎 2008『大阪遺跡』(財)大阪市文化財協会編より

目次　◆平成 22 年度秋季企画展『やおの旧石器時代と縄文時代－八尾に海があったころのくらしー』から(p１～3)
◆平成 22 年度のイベントから(p３)　◆考古学よろずコラム第４回(p４)、イベント案内／編集後記(p４)

②八尾南遺跡と太田遺跡の後期旧石器時代

八尾南遺跡・太田遺跡では、これまでに７箇所で後期旧石器時代後半の石器群が見つかっています(図２)。八尾南第３・６地点(八尾南遺跡の旧石器出土地点番号は『旧石器考古学 38』による)、および太田遺跡第８次調査からは瀬戸内技法で作られた約20,000～17,000年前の「国府型ナイフ形石器」が見つかっています。同第２地点からは、約15,000～13,000 年前のナイフ形石器文化の終末期に位置付けられる「小型ナイフ形石器」が見つかっており、地点により時期差のある石器群であることがわかりました。

図２　八尾南遺跡・太田遺跡の旧石器出土地点

写真１　国府型ナイフ形石器(太田遺跡第８次)

３．縄文時代の八尾

①縄文時代の自然環境と市域の遺跡

氷河期が終わり、温暖化が進むと海水面が上昇しました(縄文海進)。およそ 12,000 年前(草創期)には、海水面が 20,000 年前に比べて約 30m上がり、さらに約 5,500 年前(前期後半)の縄文海進の最盛期には、海岸線が河内平野南部に達し、市域では亀井町付近まで海(河内湾)が広がっていたようです(図３)。しかし、約 5,000 年前の中期以降は再び海水面が後退し、河内湾は海水と淡水が混じる河内潟へと変化し、河内平野の沖積化が進みました。このような環境のもと、河内湾(潟)周辺の生駒山地西麓部、河内台地北部、上町台地周辺は狩猟・漁労・植物採集を中心とした縄文時代に適した地域でした。市域の縄文時代遺跡は、草創期では八尾南遺跡、早期～中期では水越遺跡・恩智遺跡、後期以降では山賀遺跡・池島・福万寺遺跡ほかで発見されています。

図３　河内湾Ⅰの時代〈縄文時代前期〉(約 5,500 年前) 趙哲済・松田順一郎 2008『大阪遺跡』(財)大阪市文化財協会編より

②市域の縄文時代遺跡の立地

約 12,000～2,300 年前の約 10,000 年続く縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の６時期に区別されています。市域では前期～中期には河内湾、後期～晩期には河内潟の環境下にあったため、縄文時代の遺跡は生駒山地西麓部(楽音寺・花岡山・水越・教興寺・恩智)、河内台地縁辺部(八尾南・太田・田井中)、河内湾(潟)の南辺部(山賀・佐堂・久宝寺・池島・福万寺)で見つかっています。特に河内潟の南辺部の平野部分においては後期中葉以降、池島・福万寺遺跡や山賀遺跡で集落が成立しており、河内潟周辺が比較的安定した環境であったことが推定されます。

図４　八尾市域の旧石器～縄文時代の遺跡

③市域の縄文時代の遺構と遺物

1．遺構　市域で確認された遺構としては、水越遺跡の中期後半の居住域が最も古い例です。竪穴住居としては八尾南遺跡(写真2)で発見された後期前半のものがあります。晩期以降の遺構は、恩智遺跡・池島・福万寺遺跡・田井中遺跡等で発見されています。

2．遺物　草創期の縄文土器の出土はありませんが、石器は有茎(舌)尖頭器・石鏃が八尾南遺跡で見つかっています。

早期では、高山寺式の押型文を持つ深鉢があります(写真4)。生駒山西麓部の標高96m付近で発見されました。

前期では、前期中葉の爪形文や突帯文と縄文を併用した北白川下層Ⅰ・Ⅱ式系の深鉢が亀井遺跡・恩智遺跡から出土しています。

中期では、キャリパー形の口縁部を持つ深鉢が多く、爪形文や隆帯が多用されています。中期前葉～中葉では瀬戸内海系の船元Ⅰ～Ⅳ式、後葉では里木Ⅱ式・北白川C式があります。中期中葉では恩智遺跡・久宝寺遺跡、中期後葉では水越遺跡・亀井北遺跡から出土しています。

後期では、後期前葉では磨消縄文を特徴とする瀬戸内系の中津式(写真5)、後期中葉では縁帯文土器、後葉では凹線文土器が中心となります。後期前葉では恩智遺跡・八尾南遺跡、後期中葉では久宝寺遺跡・亀井北遺跡、後期後葉では山賀遺跡から出土しています。

晩期では、晩期前半が凹線文・沈線文を主体とする滋賀里Ⅱ～Ⅲb式が中心で、恩智遺跡・教興寺跡・亀井遺跡から出土しています。晩期後半では無文・突帯文土器を主体とする船橋・長原式が中心で、八尾南遺跡・田井中遺跡から出土しています。

写真2　縄文時代後期の竪穴住居
(八尾南遺跡第15次)

写真3　縄文時代の石器類
(八尾南・恩智遺跡ほか)

写真4　八尾最古の縄文土器深鉢片《高山寺式》
(薗光寺跡)

写真5　磨消縄文が見られる縄文時代後期深鉢《中津式》(恩智遺跡)

平成22年度のイベントから

● 特別講演会の開催

2010/10/24(日)

秋季企画展「やおの旧石器時代と縄文時代ー八尾に海があったころのくらしー」に関連して、大阪府教育委員会の大野薫氏を講師に迎えて「土偶と縄文時代のマツリ」と題した講演会を八尾市文化会館で実施しました。40名が参加され、講演後の数多くの質問から、縄文時代の精神文化に対しての興味・関心の高さを改めて実感しました。

講演会風景

● 大人のための考古学教室

2011/2/12·19·26（土）

2月の第2～4土曜日に大人を対象とした考古学教室を行いました。3日間にわたり、遺構·遺物の見方や出土品の整理作業(復原・拓本実習)、実験考古学として石包丁の製作等を行いました。参加者は4名でしたが、実際の土器や石包丁を使った稲穂刈り体験を通じて原始・古代を体感されたものと思います。

実施風景

よろず考古学コラム 第4回

八尾市出土の主な遺物や遺構を紹介します。

環形付木製品と久宝寺古墳

原田昌則〈財団法人八尾市文化財調査研究会〉

環形付木製品は、平成３年度に行った久宝寺遺跡第 13 次調査(八尾市神武町)の古墳時代前期前半(４世紀前半)の河川から発見されました。

一本の材から丸棒状の柄部と環状の把手部が作られています。現存長 15.5 ㎝、環外径 7.9 ㎝、環内径 3.9 ㎝、柄径 2.1 ㎝、柄現存長 7.9 ㎝を測ります。柄の先端部分は焼け焦げていますが、それ以外は良好な状況が保たれていました。全体に加工は精巧で、環状部に黒漆が塗られているほか、柄部分には糸を巻いた後に黒漆が塗られています。本例以外には滋賀県能登川町の斗西遺跡、奈良県宇陀市榛原町戸石・辰巳前遺跡、大阪府堺市下田遺跡があり、４点共に古墳時代前期のもので形態や加工方法に共通点が見られます。なかでも、残りが良い下田遺跡例では、柄先端部分が漏斗状に開き上面形が円形状を呈する部分が作られています。柄先端部分を欠く他の３例についても下田遺跡例と同様の形態が想定され、画一化された形状や柄部分の加工方法、環状部の漆塗布範囲等に共通した製作技術が認められるため同一工人・工房による製作品であった可能性が高いものと推定されます。また下田遺跡例から柄先端部分に大鹿の尾や馬の鬣・尾を房状に束ねて縛ったものが取り付けられていたと想定すれば、麈尾ならび同義語的に使われる払子のような形態が想定されます。

麈尾・払子は中国に起源を持つもので、伝中国浙江省紹興出土の天紀元年(277 年)の三国呉の紀年銘を持つ神獣鏡に麈尾を持つ神像が見られるほか、日本では京都府木津川市の椿井大塚山古墳出土の画文帯対置式神獣鏡の神仙像の左手に持たれた麈尾(写真７)があり、古墳時代前期においては権威の象徴としての威儀具であったと考えられます。

環形付木製品が発見された調査地の南西約 450m には、中河内地域で最大規模を持つ古墳時代前期前半(４世紀前半)の前方後方墳の「久宝寺古墳」(全長約 35m、周溝幅６～10m)が発見されています。したがって、この環形付木製品(麈尾)は「久宝寺古墳」に関わる地域首長の所有物であった可能性があります。

写真６　環形付木製品
久宝寺遺跡第 13 次

写真７　左手に麈尾を持つ神仙像〈京都府木津川市椿井大塚山古墳出土〉『1953 椿井大塚山発掘調査報告』より転写

編集後記

昨年夏の記録的な猛暑の記憶が薄れる中、今冬は酷寒の日々。発掘調査を主たる生業とする我々にとっては辛い。

過去の環境変化や人間活動の痕跡を探求する時空を超えた仕事とは言え、直面する「今」という時点の自然環境や社会趨勢に背を向けることはできない。

永久の歴史は「今」の積み重ねであり、「今」憂うことなく「今」を大事にして歴史を見直してみては？

(MH)

イベント情報

◆通常展「八尾の地宝－埋蔵文化財調査センター収蔵品－」
内容：八尾市域から出土した旧石器時代から奈良時代の出土遺物を中心に展示
期間：平成 23 年３月２日(水)～６月 17 日(金)
時間：午前９時～午後５時(入館は午後４時半まで)
休館日：土、日、祝日

◆講演会等「やお・埋蔵文化財トークーあの遺跡・遺物は今ー」
演題：大竹西遺跡出土の鋳造鉄剣について
講師：西村公助〈(財) 八尾市文化財調査研究会〉
日時：平成 23 年５月 22 日(日)午後１時 30 分～(先着 30 名、資料代 200 円)

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌
『八尾・よろず考古通信　第４号』
発行：2011 年３月 31 日、八尾市立埋蔵文化財調査センター
(編集：財団法人八尾市文化財調査研究会)
〒581－0821　大阪府八尾市幸町四丁目 58－２ TEL・FAX072－994－4700
URL　http://www.kawachi.zaq.ne.jp/zyao_maibun/center/
E-mail maibun_zyao@kawachi.zaq.ne.jp